

いる。

その半分が番匠川に投影されて、ここで一枚の煙草の葉の全貌が寫し出されるのである。

この景観は「お作事浜」の外に、「れ場」「池船橋」の上からも見られるが、子供の頃から「お作事浜」が近かった為と静かだったからで、鑑賞も「お作事浜」が多かった。

番匠川が改修され、天神津留から本流の流れが変わったので、あたし等の、なつかしの天神津留は、すっかり愛顧してしまつたことであらう。

水立おろし

今でも時々思い出して微笑を禁じ得ないのは、池船橋々畔から出る「水立おろし」の衆着である。

出たとこ勝負と言ふか、乗った人と船長と呼びどめた人の三位一体が出来たのである。現在のバス乗車のようないらだたしさは無論ない。乗客も、船頭も、先客も、正になごやかなもので、住吉浜まで出てはあとがえり、出ては呼びとめられるとあとがえつていた。

あたしは父の伴(とも)をして、よく釣りに、又小作地の検分等につれられたものである。水立街道の起点、つまり水立おろしの終点におろされるのは、一時間半も二時間もかかった後であった。

途中「茶屋が鼻」や「鳥越」(とりこえ)を通過する。茶屋が鼻周辺は汐もさすので、大きな魚の釣り場としてよく釣れたし、鳥越は山が低く、海から水立方面へ帰ってゆく鳥が、羽を休ませるために、低い場所を選んで飛ぶのだと教えられていた。蛇崎からここの渡しをおたると水立街道の起点となる。

わたし達の若い頃は、桜の名所と言えば、三の丸、浦

代峠、それに黒沢とよくいわれていた。三の丸、浦代峠はよく記憶に残っているが、黒沢の桜は全然記憶にないが、今はどうなっているかであらうか。

老木が枯れれば若木を植える。平素毛虫の注意をする。肥料も適度には、その土地の人達が愛撫しなければよい木はそだたない。

三の丸も、浦代峠も、黒沢の桜も、かつては有名な名所であった。よき若木が、つぎつぎに植えつかれて、今もなお、相変らない名所として引継がれているであらうか。

(おわり)

郷土唱歌二首に見る

黒澤の桜

国水田独歩祥介の投書(某書)と見られた(案)際(は)そうであった(鶴谷学館の生徒であった文)学青年(石丸敏一)の書き綴つたもの、余日(少)ないまに問題としていた二首のみを、ける。

「大分県地理歴史唱歌」(明治三十三年出版)は伯市戸(保田)久太(氏蔵)

是 過ぬる西南戦争に

野津少将が駒(うま)なぐ

桜の名所黒澤も

いざや一度はゆきて見ん

「郷土唱歌」(明治三十六年十月出版) 用(氏蔵)

是 花は桜木人は武士

そのものゝふの名をさしるす

桜の名所黒澤は

谷の河鹿の声もよし